デグーの千夜一夜物語

第三夜　シーシュポスの神話

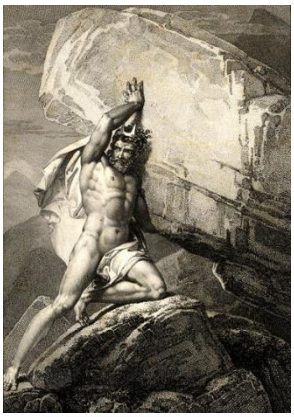
1　哲学界の魔王

シーシュポスは、神々を欺いた罰として労役を与えられた。
彼は自分の背丈よりも高い大岩を、山の頂上まで転がして、
置いてこなければならない。
シーシュポスは両腕で岩を上手に繰りながら、上へ上へと
押し上げていく。大岩は急な勾配によって重みを増すため、
彼の全身からは大粒の汗が吹き出していた。
一つ間違えば大岩は山の麓まで落ちていくため、
一瞬たりとも気が抜けない。

いったい幾日が過ぎたのだろうか。
ようやく頂上が見えてきた。
最後の力を振り絞り、シーシュポスは大岩を押し上げた。
だが、大岩を安定させるにはあまりに山頂は狭い。
大岩は、ゆっくりとシーシュポスの向かいへ傾き、
そのまま麓まで転がり落ちていった。

シーシュポスは永劫の罰を与えられていたのだ。

シーシュポスの岩



2019 年 2 月、インドでとある青年が「同意なしに自分を産んだ」として両親を訴えました。一昔前ならば、反抗期の子どもの「産んでくれなんて頼んでいない！」という古典的なセリフとして笑い飛ばされていたものかもしれませんが、最近は**反出生主義**という哲学として力を持ってきています。

反出生主義の主張は、苦痛はない方が「良い」が、快楽がないことは「悪くない」程度という「苦痛と快楽の非対称性」があるため、人生は苦痛が上回るとし、子どもを産むのは倫理的に許されないというものです。この哲学は、環境問題や人口増加の社会問題を受けて生まれた哲学でしたが、憎むべく両親を攻撃する正当化の手段として使われることが多いようです。この哲学書の翻訳者は、反出生主義から両親を攻撃するのは無理があると述べていますが、紙幅の関係上ここではこれ以上触れません。

さて、反出生主義は、哲学史的には、ベンサム以降の功利主義が行き着く先だと思われます。功利主義とは、快楽を基準に社会全体の「最大多数の最大幸福」を考えようという哲学で、多くの学問の基礎となっています。ところが、**「幸福＝快楽」**とした結果、反出生主義が生まれてきてしまったのです。最大の幸福を考えるならば、そもそも人は生まれるべきではないと。これではまるで魔王の発想ですね。

2　もとは心穏やかだった魔王

しかしながら、もともとの快楽主義（エピクロス）は、ベンサムの言うような快楽を真の快楽とはみなしていませんでした。

なぜならば、快楽は外的要因に依存してしまうため、不安定なものになるからです。言われてみれば、お金も名誉も手に入れるのは大変で、しかも大抵の場合、際限なく求めてしまうものです。性に関しても、より良い相手がいるのではないかと考えてしまったら、地獄への片道切符ですよね。

さらに、快楽そのものを目的とすると快楽が得られにくくなるという**「快楽のパラドックス」**というのもあります。例えば、スポーツは我を忘れて熱中している時が一番楽しい時ですが、「楽しもう！」とすると逆に集中できなくなってしまうことがあります。目的が行為そのものではなく、快楽になってしまうことで、逆説的に快楽が得られなくなってしまうわけですね。

以上のために、エピクロスは本当の快楽を**「心の平穏（アタラクシア）」**だと考えました。たしかに、フロイトも性欲は快感のために満たそうとするのではなく、発散して落ち着くために求めると述べています。

それゆえエピクロスは、肉体的欲求も、のちに心の平穏を乱さない程度ならば追求して良いとしつつも、彼自身は「隠れて生きよ」と述べ、地位や名誉とは無縁の生活をし、「良き友達がいればそれでいいじゃないか」とアタラクシアに生きていきました。

実際、彼は同時代のストア派という哲学者から散々批判されましたが、なぜか最後には「でも、めっちゃいい人なんだよね」と褒められる人間だったそうです。

3　哲学界の勇者

一方で、「幸福＝快」としない幸福主義者と呼ばれる人もいます。アリストテレスやアランやラッセルなどは、その代表者です。それぞれの主張は異なりますが、彼らはみな活動を重視しています。そして人間としての善をきちんと考え、その善に従って行動することが幸福だと考えているようです。

善とはなにか。それは人間としての目的を見つけ、自己以外のために活動し、しかもそれが快感となるような自己実現を行うことです。ギリシャ時代ではそれが美徳でした。ストア派が、エピクロスを批判したのも、まさにこれが理由です。ストア派は、理性によって自然の法則と秩序に従うという社会全体を考えていたのにもかかわらず、エピクロスは隠れることで自分中心にしか考えていないことを批判したのですね。

さて、幸福主義者によると、私たちが幸せになるためには、精神的成長が必要不可欠だということになります。はたして、そんなことが可能なのでしょうか。

なるほど、心理学者のマズローは、人間の欲求は満たされていくとより高度なものとなり、最終的には自己超越し、社会のことを考えるようになると主張しているし、発達心理学者のエリクソンも、中年になると体が衰え、死が近づいていることを実感するので自分が生きた証を残したくなり、社会に目を向けるようになるといいます。

でも、単純に大好きな人が悲しい顔をしていたら、良いことがあっても「幸せ」だと言える人は少ないのではないでしょうか。私たちはそもそも自分だけが良ければそれでいいと思える生き物ではないはずです。

だれも、それ自身完全な離れ小島ではない。
すべての人間は大陸の一部、本土の一部である。
もし土くれが海によって洗い流されると
ヨーロッパはそれだけ少なくなる。
それが岬であろうと、
あなたの友人の領地であろうと、同じである。
いかなる人の死もまた、私を減少させる。
弔いの鐘が誰のために鳴っているのかを知るために
人を遣わす必要はない。
それはあなたのために、鳴っているのだ

ジョン・ダン「誰がために鐘は鳴る」

4　魔王はなぜ誕生したのか

古代では幸福主義の方が優勢でした。ところが、ベンサム以降、快感が重視されるようになったのです。資本主義はその傾向に拍車をかけました。資本主義社会は消費をしてもらうことでまわるので、商品を売るために人の快感を刺激するからです。

さらに、資本主義では「自由で平等な」個人が必要とされるために個人主義となります。王様や貴族がいる社会では、対等な取引ができないので、商品中心の社会になりにくのですね。個人主義となると、人生を宗教や国やイエのためではなく自分のために使いたいと思うようになります。すると、人生をすこしでも「楽しい」ものにしたいという**「楽しさ至上主義」**と、自己実現したいという**「能力開発主義」**が人生の動機となってきます。これは一転すると、楽しくなければならないという義務になり、「楽しくない」いまへの焦りとなります。自己実現だって、なかなか思った通りにならないものです。こうなってしまったら、人生とは辛いものになってしまいます。

5　哲学の魔王を打ち破るには

このような事態をさして、ニーチェはかの有名な**「神は死んだ」**というセリフを残しました。ニーチェは神が死んで、社会は自由になったと単純に喜んでいたわけではありません。神や社会から与えられた価値観や人生の目的がなくなることの危険性にも気づいていました。「価値観は人それぞれ」「人生の意味は自分で見つけるものだ」。自由といえば聞こえはいいですが、「正解」がない中で、これぞというものを人は選べるものなのでしょうか。すべてが等しい価値しかないのであれば、私たちが人生をかけるほどのものなんてあるのでしょうか。

ニーチェは、「何をしたって結局意味がない」と、人生に絶望することを**ニヒリズム**と呼び、それを乗り越えるには、「心からの悦び」を思い出すことだと考えました。もし、「生まれてきてよかった！」と一度でも思えることがあったなら、私たちはすでにニヒリズムを超えているというのです。なぜなら、そのような体験ができたのは、これまでの人生のすべてがあったからです。つらいことも悲しいことも全てが連なって、そのような喜ばしい出来事が起きたわけですね。たった一度でもそう思えれば良いとするならば、反出生主義の不快は快を超えるという意見も退けることができます。

しかしながら、果たして「生まれてきてよかった！」などと思えるような経験ができる人はどれだけいるのでしょうか。そもそも、反出生主義者は、そのような体験が一度もなかった人なのではないのでしょうか。ニーチェの主張は、恵まれた条件のもとでの主張なのかもしれません。

6　神々からの問い

これに対して、フランクルという哲学者は、そもそも問いが間違っているのではないかと考えました。それは、「人生に意味があるのか、ではなく、人生から意味を問われているのではないか」ということでした。人生に意味があるのかどうかと考えてしまうと、どうしても素晴らしい出来事**（体験価値）**や、私でなければできないことをした**（創造価値）**などの価値を得たかどうかという観点に陥ってしまいます。

しかしながら、フランクルは第二次世界大戦中に、アウシュヴィッツ収容所に収監されてしまいました。そこではもちろん素晴らしい体験や創造性のある生活などとは無縁です。自由のない厳しい肉体労働に、与えられる食事は一日一回のみ。それも水のようなスープとパンひとかけらだけでした。多くの人は希望を失い、死んでいくなかで、彼は獄中で何度も何度も、「この苦痛に何の意味があるのか。私の人生に何の意味があるのか」と苦悩しました。

ところが彼は、そのような環境の中でも、自分よりも辛そうな人にパンを譲っている人をみたのです。厳しい労働中に、沈みゆく夕日を眺めながら、「世界はどうしてこんなに美しいんだ」とつぶやく声を聴いたのです。フランクルはそんな彼らを見て気づきました。「私たちが人生に意味を問うのではない。このような環境の中で、お前たちはどう生きるのか、と問われているのだ」と。クソみたいな人生でも、人間はどのような態度を取るかという自由だけは残されている。そこに人生の価値**（態度価値）**があるのだと考えたのです。

7　神々への反抗

これまでの議論をまとめると、三つの生き方が出てきました。一つは快楽等の情動（感情）に委ねようというもの。二つ目は人生に目的を持って生きていこうというもの。三つ目は強い意志を持って生きていこうというものです。

これらは哲学上で未だに議論されており、まったく決着がつきません。快楽主義では反出生主義が現れるし、目的論では美徳を追求するあまりにストイック（ストア派が語源）となるし、意思論ではあまりに「タフの美学」となってしまいます。

それでも、不条理を強いる神々に打ち勝つには、美こそが必要なのかもしれません。神学者であるマルブランシュは言います。「なぜ全知である神は世界を作る必要があったのか？それは美しさだけは作らなければ感じられないからだ」

はるか下の世界へと転がり落ちる岩をじっと見つめたあと、
山頂から降りるシーシュポス。その足取りは重い。
彼はこの夜に終わりがない事を知っているが、歩み続ける
道中、突然射してきた月の光や、
足元に咲いた花に微笑むときもある。
そして、山のふもとに到着したら、
石に手をかけ、また一歩一歩と踏み出すのだ。
彼はそっと神々を否定する言葉をつぶやく。
「すべてよし」

アルベール・カミュ

文責：　田井　勝